

施設による事例報告

社会福祉法人至誠学舎立川 至誠キートスホーム園長 大村 洋永 氏

自分らしく生活し、普通の暮らしを取り戻す為の、さりげない支援

社会福祉法人至誠学園立川

至誠キートスホーム園長 大村洋永

自分らしく普通に生活する

老いて介護が必要になった時（老人ホーム入居が現実となった時）

不安・恐怖・嫌悪感・孤立感 → 安心感・満足感・信頼感…→生活の継続性
喪失感・無力感・失望感 → 効力感・充実感・存在感…→残存能力の開発
自由に気儘に自分らしく暮らせない→選択肢が多い・主役感…→自己決定の原則

キートスにおける居住形態とケア実践

（1）ハードとソフトのダイナミズム～対人関係における4領域の支援～

- ①個別ケア（寄添うケア）
- ②関係を促すケア（繋げるケア）
- ③グループワークケア（同居者の絆・個性の伸長）
- ④社会参加のケア（家族や地域の人々との関係の促進）

（2）生活を支援するケアのポイント

- ①コミュニケーションを重視する（第二の栄養素）
- ②スキンシップをすること（心身のビタミン剤）
- ③入居者の把握とケアプラン
- ④家族との精神的な絆をサポートする（家族関係の代替ともなる）

生涯をその人らしく広げる場所・その暮らしぶり

キートスの人々 ～キートスホームの日常～

“自分らしさ”の復活と創造

「風」そのものの存在は、私たちの目には直接感じられないが、空の雲が漂う有様や、辺りの木々を揺るがすことで、私たちは風の存在に気付く。「時」も同様に、それ自体は存在の認識ができないが、例えば子どもたちの成長ぶりに、時の経過が実感される。生活ぶりには、時の経過とともに現在の生活の有様が滲み出ている。

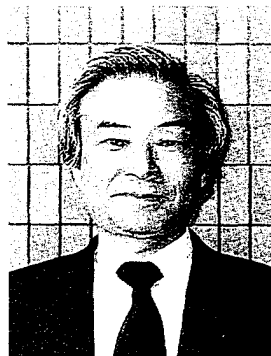
生活ぶりとか暮らしぶりは、“その人らしさ”の現在の状況を端的に表明している姿でもあろう。その人らしさは、その人が生まれ出した環境・生い立ちに始まって、学んだ環境や職業生活、そして自らが築き上げて来た家族との人間関係や、更に逃れることのできない社会環境や時代など、永い時をかけて人格に刻み込まれ、生活習慣化されたものの表出とも言えよう。

ここで忘れてはならないことは、極端な表現ではあるが、高齢者福祉施設に入居されておられる多くの人々は、急性期の医療・治療の過程で、“自分らしさ”“自分らしく生きること”を中断して（させられて）しまった方々であるということである。高齢者が施設に居を移し、生活を始めるとき、慢性疾患という後遺症を抱えながらも、医療の配慮のもとに、生活・暮らしを建て直すという課題への自立

支援がこの時点から開始されるのである。それは、一旦病気で失われた“その人らしさ”の復活と創造のためのリハビリテーションへの支援と言えないだろうか。

リハビリテーションの原語ハビタスは、単なる機能回復ではなく、人間の存在がそこで認められる全人的回復ということ（元の意味は、教会から破門された人の権利回復。ミサ・聖餐にあずかる権利を喪失した人がその名誉を回復し、再び中心的生命にあずかること）であり、その人の存在が認められる場所・居住する環境を意味する言葉はハビタティオだそうである。ハビタス・ハビタティオはともに、各地で試みられているユニットケア実践の上で大切にしたいキーワードである。

入居者が自分らしさを復活・創造させながら自己実現に向かって行く過程は、“小春日和”のごとく当事者はもとより、その方の家族たちにとっても、希望ともなり、癒しでもある。そして同時に生活支援者としての職員が、その復活・創造への途上の一人ひとりに寄り添い、共同で生活を作り上げて行く営み（コラボレーション）、これが今日言うところのユニットケアの内実といっても良いのではなからうか。



Hironaga Omura
至誠キートスホーム
園長

大村
洋永